

情報

更生の花は
慈愛の土に咲き

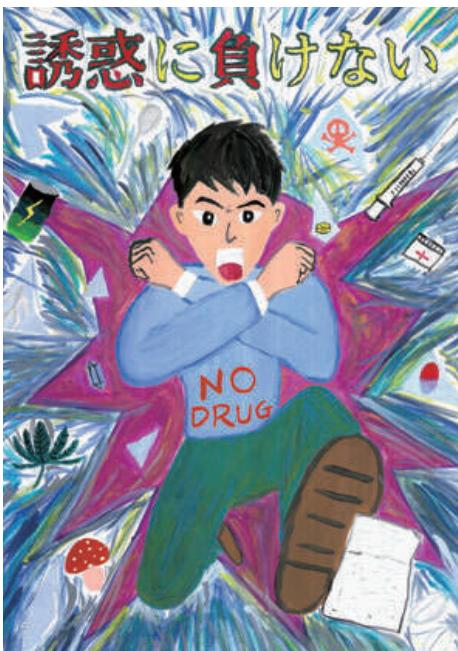


文京区保護司会

令和7年度 文京区内の中学校生徒による 薬物乱用防止ポスター・標語

文京区地区協議会 地区会長賞

ポスターの部



本郷台中学校 2年 湊 雅来 さん

標語の部

その誘い 勇気を出して断ろう 自分で守る 自分の未来

第八中学校 1年 松本 拓士 さん

立ち止まれ 未来が壊れる その行動 きっと後悔 薬物乱用

第六中学校 1年 徳増 陽菜 さん

INDEX

- 「サポートセンター オ'ハナ」インタビュー 2
- 地域活動紹介 「文京アートプロジェクト」 4
- 令和7年度ブロック別保護司組織運営連絡協議会 6

- | | | |
|--------------|-------|----|
| 令和7年度第Ⅱ期定例研修 | | 8 |
| 会務報告 | | 9 |
| 更女だより | | 11 |
| ホッと一息 あとがき | | 12 |



女性依存症者の回復をサポート。 サポートセンター オ'ハナ

北区滝野川にあるサポートセンター「オ'ハナ」は、特定非営利活動法人ジャパンマックが運営する女性の依存症者のための回復施設です。アルコール・薬物・ギャンブル・摂食障害・窃盗症など、さまざまな依存症からの回復と成長を目指す女性をサポートしています。依存を使わない生活を手に入れ、やめ続けるを実現するための回復支援プログラムを行っているオ'ハナ施設長の棚原可奈子さんと副施設長の山口悦子さんにお話を伺いました。

(文:広報部 塩川浩司)



サポートセンター「オ'ハナ」とは

棚原..サポートセンター「オ'ハナ」は、特定非営利活動法人ジャパンマックの中で、女性に特化した依存症の回復支援をしている施設です。

4年前までは女性の生活訓練のみの事業所でしたが、生活訓練の2年～3年間だけでは、依存症の病気の回復というのは難しいので、生活訓練の期間を終えた後でも安定した回復プログラムを過ごせるようにB型事業所を併設しました。特に女性の場合は、元いた環境に戻る人が多いので、家庭や実家に戻るのにも、十分に安心して過ごせるようになるまでの回復期間が必要だからです。

プログラムのベースになるのはジャパ



棚原可奈子施設長（右）プロフィール

中学生で不登校になり、摂食障害を発症して、過食、拒食、過食嘔吐を繰り返し、18歳でアルコール依存になる。19歳で結婚後、ワンオペ育児もあって心が疲弊し、25歳で精神病院に入院。プログラムで立ち直り、「太っていても自分は愛される。自分の人生は自分で決める」ことを自覚。オ'ハナに来て10年、3年前より施設長を務める。

山口悦子副施設長（左）プロフィール

もともと専業主婦で、夫との関係や家族との共依存からアルコール依存になり、50歳で精神病院に入院。12ステッププログラムにつながり、「家族のためでなく、自分のために生きる」ことを選択。「世間一般では負の体験でも、それを生かせる場所があると、オ'ハナに声をかけてもらって7年目。60歳過ぎて社会につながり、やりがいのある人生を送っている!今では浮気してくれた旦那に感謝です。(笑)」

依存症の種類

棚原..依存物で多いのはやはりアルコールと覚醒剤等の薬物、最近問題になつている市販薬のOD、ギャンブル、ゲーム、ネット依存等いろんな人がいます。女性に特徴的なのは摂食障害の人が結構多くて、摂食障害×アルコール等のクロスマルティクションの人も多いです。若年層では、ネット依存が増えてます。

オ'ハナは16名くらい登録があって、平均で10人前後の人が来所されています。

ンマックの12のステップ（アルコール依存症からの回復を図るために示した一連の原則・実践手順）です。オ'ハナでは、8割が当事者の依存症者スタッフ、2割が非当事者の専門職でプログラムに取り組んでいます。

オ'ハナでの生活

棚原..利用者さんは、通所の人とロイസでの寮生活の人の2種類います。寮は1年365日開所しています。毎朝7時半起床で、オ'ハナに5時半まで。それが終わって、近隣の自助グループに参加して、戻るのが夜の9時半以降になるので、1日中仲間と一緒に行動する結構厳しいプログラムです。その中でお酒や薬物等の依存物を手放しながら、考え方や行動の

仕方を変えていく。どちらかといふと体で覚えていく感じですね。

山口..最初は行動から変えて、その中でだんだん感じ方やものの受け取り方、ものの見方に変化が訪れてきて、薬やお酒が楽に止まっているという実感が持てます。中には、子育て中のお母さんですか、介護中の人たちには通所で、週に3～4回とか、来ていただいて居場所として使っていたら、今は通所で、週に3～4回とか、来ていただいて居場所として使っています。



話を聞く棚原所長。「回復が終了したらバイバイではなくて、最近困っていることないですかとか、月に1回いいからボランティアに来てくださいねとか。つながりを持ち続けることを一番大切にしています」

寮のロイズは定員10人で、今7人が利用されています。東京都の福祉ホームなどで、家賃は東京都の補助が降りるので、利用料だけお預かりしています。朝食当番があつて、朝食だけ全員揃つていただきます。

アディクションとトラウマ



明るいミーティングスペース

棚原・何かしらの逆境体験をされている人がほとんどです。特に多いのが家族との問題で、真綿で首を絞められるようならずつと続く精神的な虐待や、男性からの暴力、性被害を受けている人もいます。

依存症の症状が大きく出るのは早くして20代ですけど、女性の場合40歳前後でオハナにつながつてくる人が多いのです。が、そこからの心のケアが課題です。例えば10代で性暴力を受けていて、40代でつながつても20年以上苦しんでいて、治療をしてもうまくいかず、自尊心だけ傷ついて、その傷を埋めるためにお酒や薬物、摂食障害になりながら、自傷行為を取り入れて

人が多いのが家族との問題で、真綿で首を絞められるようならずつと続く精神的な虐待や、男性からの暴力、性被害を受けている人もいます。

依存症の症状が大きく出るのは早くして20代ですけど、女性の場合40歳前後でオハナにつながつてくる人が多いのです。が、そこからの心のケアが課題です。例えば10代で性暴力を受けていて、40代でつながつても20年以上苦しんでいて、治療をしてもうまくいかず、自尊心だけ傷ついて、その傷を埋めるためにお酒や薬物、摂食障害になりながら、自傷行為を取り入れて

生き延びてきた人たちは、依存が止まつて安心感が出てきた時に、トラウマの症状が深刻化する人も多いのです。最近のケースでは、依存症だけじゃなくて、もともと発達障害を持っている人と、知的面で境界域の人も多いです。

女性ならではの依存と回復

棚原・女性の場合、結婚した相手で本当に左右されるることは多くあります。また、お子さんの発達に問題があつたりなどで、育児のうまくいかない苦しさから

何かに依存していく人は多いのです。世間の母親神話みたいな呪縛を本人もそう思っているから、『うまくできない私なんて』という考え方になつてすごく辛いのです。家族とだと感情がぶつかって疲弊してしまいますが、オハナではじっくり話を聞くことができると、入寮している人に関しては、家庭のことを一回棚上げすることができます。自分の治療にだけ向き合えることが大きいです。

最近では、若い人がホストに売掛けでお金を使わされて、風俗で稼いで、アルコールや市販薬の依存になつてしまつているというケースが増えています。ほとんど家族からの相談なのですが、本人がその気にならないとなかなか回復は難しいです。

女性専用施設の意義

やつていたら、自分でもこうやつて生きられようになるということを伝えているのです。

山口・社会経験をしたこともなく、家庭の中で過ごしてきた女性が、社会に出るために組まれたプロセスを踏んでも、違和感を感じる人も多くいます。女性の場合は、社会復帰のうえに家庭で自分の安心できる場所を作り上げると

いうプラスアルファの目標もあるので、そこを共感できるスタッフや仲間たちとの出会いは重要です。

棚原・女性に特化したプログラムとしては、パッチワーカや、水彩画、アロマテラピー、あと長らく行つているのがヨガ。

ドラマセラピーのプログラムは面白くて、自分、夫、子供、同僚等、それら全員を仲間たちに演じてもらって、それを見ることによって客観的に自分の人生を振り返ります。人生のその場面で、嫌な気持ちだったけど、大切な感情でもあつたと、自分に対する尊敬する気持ちを育むみたいな、様々な要素があるプログラムです。

保護司へのメッセージ



B型作業所で製作販売しているグッズ

山口・元々男性に対して、心を開かないタイプのスタッフのことですが、プログラムで回復した後、すごく惹かれる旦那さんと出会つて、今二人目を妊娠している人がいてびっくりしています。オハナに入つて自分の幸せの道を自分が選択して、子どもを産みたいって思えるまでになつた。そんな未来の希望もあるんだなあっていうことを改めて感じました。

回復の事例

棚原・オハナでは、依存から回復したスタッフが、利用者のお手本であり、目標にもなっています。このプログラムを

棚原・保護観察中の人の保護司の先生が来てくださつて、先生から見て最近どうですか?っていう言葉のやりとりで、必要な助言を頂くこともあります。ですからぜひオハナを活用していただければと思います。保護司の先生方には、依存症は回復できる病気だということを、一緒に信じて活動していただけたらすごく心強いと思います。私たちが連携することでも、社会の中で更生できる人が一人でも多く増えたら嬉しいです。



アートを介して人と地域をつなぐ

「街じゅうボーダレスアートミュージアム構想」

文京アートプロジェクト 小松一世

伝

統文化が残り、多くの文化財を所有する文京区。ギャラリーや文化施設も点在し、おそらく30分圏内に行ける美術館や博物館も幾十とある恵まれた環境に暮らし、私は日々大好きなアートに触れられる幸福感を味わっています。でも、

はたして地域のどのくらいの方が日常でアートに触れ、楽しんでいるのかしらとふと気になりました。もつと身近に、生活の延長線上でアートを楽しめる環境があつたら、日常に「アートの視点」を取り入れられた意団体「文京アートプロジェクト」を立ち上げたのが2015年でした。美術館が好きで、ボランティア活動として東京都美術館と東京藝術大学による協働事業「とびらプロジェクト」に参加し、そこで経験した「アートを介して人と人、人と地域をつなげる」活動を住み慣れた文京区に持ち帰りたいと思つたこともきっかけの一つでした。

地域で生まれたアートに光をあてる

はじめは「谷中芸工展」や「神田川アートブロッサム」などの地域イベントに参加してものづくりワークショップやアート散歩などを企画したり、高齢者施設



谷中芸工展



高齢者施設での鑑賞会

やカフェでアート鑑賞会を開いたりと、小さな活動を続けていました。神社の境内でアートカードを広げて、

チケット作品鑑賞会をしたこともありました。そのような活動を続ける中で、次第に他の地域活動仲間との関わりも増え、地域活動団体の交流イベント「文京まちたいわ」のアートワークを担当させていただくことになりました。その時に会場としてお借りした文京福祉センターで、リアン文京の利用者さんによる多数の作品が目に留まりました。壁面にきれいに展示された作品

もありましたが、中には作品未満の落書きのようなものや、生活支援の一環で描かれた紙片など、廃棄を待つばかりとなつた紙類も山積みとなっていました。そ

の、私にとっては宝の山のような用紙の一つひとつを集めて、イベント用バナーをデザインしたことから、施設のアートワークや作品展示に携わるようになります。さらに、区内の障害者支援施設で作られた商品の販売会「ハートフル工房」のお手伝いをする機会にも恵まれ、複数の施設で日々人知れず生み出されている個性豊かな作品が多数あることを知りました。

地域で生まれた潜在的なアート作品に光をあてることで、街にエネルギーを吹き込むことができるのではないか、無名だけど個性あふれる創作者の表現として示すことで、街に新たな価値を与える、地域の魅力向上や文化的資源の発掘に繋げることもできるのではないか・・・そんな期待から、2022年に文京区社会福祉協議会の「Bチャレ（提案公募型協働事業）」に「街じゅうボーダレスアートミュージアム構想」を提案し、

展覧会「Bunkyo Brut」

2022年に文京区役所1階のギャラリーシビックで初開催した「Bunkyo Brut」つながりのはじまり展



「文京まちたいわ」でのアートワーク



「文京まちたいわ」でのアートワーク

では、区内の障害者支援施設から200点を超える作品をお借りして展示しました。会場には複数人の「アート・コミュニケータ」が常駐し、ワークショップや対話により、作品鑑賞をより深める役割を担いました。また、広報の一環として、作品を大きくレイアウトした全12種類の告知ポスターを作成し、区設掲示板やコミュニティバスB-1ぐるに展開して、街全体を展示会場に見立てる試みにも取り組みました。

2023年の「Bunkyo Brut～つながりのまじわり展」では、同じくギャラリーシビックでの展覧会のほか、カフェやフリースペース、郵便局の窓辺などをお借りして、街なかでの展示も行いました。エリアマップと作品鑑賞のヒントになるクイズをチラシに掲載し、スタンプラリーのように複数の展覧会場を巡る仕組みをつくり、より日常に近いところでアートを楽しんでいただきました。また、展示作品のいくつかをモチーフとして、缶バッジやララパラ漫画をつくるワークショップなども同時開催しました。

2024年の「Bunkyo Brut～つながりのひろがり展」では、障害者支援施設に加えて都立文京盲学校や筑波大学附属視覚特別支援学校にも協力いただきました。直に触れられる木彫作品などを展示したほか、イラストレーションなどの平面作品の触図を自作して、「触って」も鑑賞できる展覧会に取り組みました。「Bチャレ」のエントリー資格は3回までというルールがありましたので、アート作品を介した地域の「つながり」を3年間でどのように展開していくかは当初からの課題でしたが、そのような試行錯誤を繰り返しながら、「街じゅうボーダレスアートミュージアム構

想」の3年間が終わりました。

アートで文京区をワクワクする街に

1年ごとにアートの種を植えるように、施設や地域の方々との関係性を育み、作品の提供の仕方を工夫して、これまでの活動の中から、ようやく小さな芽が出てきました。例えは、展覧会開催は文京区が文化事業「Art Brut Bunkyo（アールブリュット文京）展」として引き継いでくださいね」となりました。2025年、区の主催で初めて開かれた「Art Brut Bunkyo（アールブリュット文京）展」では、「Bunkyo



Bunkyo Brut～つながりのはじまり展



Bunkyo Brut 準備風景



Bunkyo Brut～つながりのひろがり展
触れる展示



Bunkyo Brut～つながりのまじわり展
を街なかに展開



Bunkyo Brut～つながりのひろがり展



Bunkyo Brut～つながりのまじわり展
ワークショップ

Brut」のアーカイブコーナーの設置や、アート・コミュニケーションの介在も踏襲していました。

今秋には、「Bunkyo Brut～つながりのひろがり展」に

出展した佐藤凜心さん（筑波大附属視覚特別支援学校の

専攻科在学中）と区内の伝統木版画工房・高橋工房様とのコラボレーションをコーディネートさせていただき、「現代アート版画」のお披露目に

合わせて凜心さんの個展開催が実現しました。

また、これまでに「Bunkyo Brut」で紹介した多くの作品群の触図制作にも着手しており、新作の展示に合わせて触って鑑賞できる展覧会の開催も企画しています。

今後も「Bunkyo Brut」として、小規模ながらも区内での作品鑑賞の機会は継続していくことを考えております。アートを介して、文京区がさらにワクワクする街になることを願っています。

- 「文京アートプロジェクト」 <https://www.facebook.com/bunkyo.art>
- 「とびらプロジェクト」 <https://tobira-project.info>
- 「谷中芸工展」 <https://www.geikoten.net>
- 「神田川アートプロッサム」 <https://www.facebook.com/kandagawa.artblossom>
- 「文京まちたいわ」 <https://www.facebook.com/bunkyomachitaiwa>
- 「ハートフル工房」 <https://www.city.bunkyo.lg.jp/p003436.html>

ブロック別保護司組織運営連絡協議会

日 時 令和7年10月27日（月）午後2時開会
会 場 東京ドームホテル 地下1階シンシア（文京区）



協議題 “社会を明るくする運動”について考える

趣旨

“社会を明るくする運動”は令和7年に第75回の節目を迎える。



協議の議長を務めた山本会長

この運動は長年継続している活動であり、特に保護司会では、相当な人的、経済的負担をしているが、一方で、今日では「マンネリ化している」「運動の趣旨が地域の方々にどこまで理解されているのか」「保護司自身が運動の意義をよく分かっていない」といった声も聞かれている状況になってしまっている。

ブロック別協議会は、各保護司会の抱える問題等を協議する場であるが、これまで、『社会を明るくする運動』を協議題として取り上げてはこなかった。しかしながら、上記のとおり、問題が顕在化してきていることから、昨年度、『社会を明るくする運動』について考へる』を協議題とすることになった。

〈中略〉第75回の節目を迎える本年度は、昨年度に引き続き『社会を明るくする運動』について考へる』を協議題とし、さらに議論を深めていくこととした。〈中略〉事前に求める意見とし

ては、

昨年度協議したことが地区保護司会の社明運動の取組にどのように反映されているか、現在の共通認識はどうか

昨年度の協議会の結果の地区保護司会での共有状況、特に出席できなかつた会員に対してもどのような配意がなされたかなどが考えられる。

（令和7年度ブロック別保護司組織運営連絡協議会 第2ブロック資料より）

文京区意見発表者 関口 昌彦

文京区では東京ドームシティ・ラクーラ周辺で啓発品配布する『社会を明るくする運動』、文京シビックホール小ホールでの中学生意見発表を中心とした『社会を明るくする大会』、文京シビックセンター区民ひろばで開催の『文京矯正展』の三事業を例年同様実施した。

体調が心配された。

また『社会を明るくする大会』では開会前に説明動画を流し、『文京矯正展』では受刑者が懸命に作業する映像を中央スクリーンで繰り返し紹介した。来場者からは「初めて知った」「感動した」という声をいただいた。

1 第75回における新たな取組（活動内容・時期・場所・資材等）

【良かつた点】

『社会を明るくする運動』におけるサ

ーの周りに「このペンギンは何？」と親子連れが集まり、社明運動の説明をする良ききっかけになつた。また、暑さ対策にも重点を置き『社会を明るくする運動』を30分遅らせ午後4時30分から開始。例年どおり看護師も配置したが7月の屋外は本当に厳しく参加者の

体調が心配された。

また『社会を明るくする大会』では開会前に説明動画を流し、『文京矯正展』では受刑者が懸命に作業する映像を中央スクリーンで繰り返し紹介した。来場者からは「初めて知った」「感動した」という声をいただいた。

関口地域活動部長の意見発表

2 第75回における取組の実施結果（良かつた点／見直すべき点）

フが持つていなかつたことが残念。次回は配布物やのぼり旗を持たせたチームとしていた。

『社会を明るくする大会』における中学生の意見発表は例年同様素晴らしく『社会を明るく』という抽象的なテーマを自分なりに考えて発表する姿は、聞いている大人たちの心に深く響いた。

『文京矯正展』は3日間で2400名の来場者があり、「毎年楽しみにしている」という声も聞かれ、品質の良さと手頃な価格が徐々に知られてきている。

【見直すべき点】

『社会を明るくする運動』を7月に屋外で開催するのは限界かもしれない。啓発品を「なぜこの暑い時期に外で配るのか?」という声は保護司からも聞かれた。皆、社明運動の意義は理解しているが、効果と安全性から時期を再考すべきときに、啓発品の配布方法についても再考の余地がある。子供が配つているからと受け取る通行人も多く、社明運動の趣旨が伝わっているかは疑問。むしろ小中学校の全校朝会などで運動の趣旨を説明し、直接配布する方が効果的ではないか。「ベンギンのホゴちゃん・サラちゃんがいる保護司会です。社会を

明るくする運動を行っています。」と毎年聞いていれば必ずと記憶に残るはず。

また、SNSは効果が期待できるので、保護局のXにも積極的に協力していきたい。ただ関係者のみにわかるハッシュタグなので、関係者には便利だが外部への広報としての効果はどうか。社明運動を知らない人の目に触れるような工夫が必要。

3 運動の意義を、各保護司会内において、どのように共有・伝承しているか

事前説明会や反省会で意義を確認しているが、正直「知っている前提」にな

りがち。新任保護司の中には「集めら

れて参加しているだけ」と感じている人

もいるかもしれない。実際、複雑な家庭環境の対象者と関わるようになつて初めて社明運動の本当の意義が実感できたという声もある。また、各事業の明運動をはじめとした保護司会の活動を説明する『出前講座』を開催している。今年は中学校で保護者250名を対象に行つた。さらに新しい試みとして、区立小学校2校にて児童を対象に更生保護について話を予定。30~40年先を見据えた「種まき」であり、子供たちが大人になつた時、自然に更生保護

要性を感じている。

4 その他 昨年度のブロック別協議会の結果を地区保護司会内で共有するに当たり、工夫したことがあれば記載されたい

今年はアンケートにも力を入れ、多くの方に回答いただき、社明運動の意義や保護司・保護司会の活動について認知してもらつた。アンケート結果は比較的反響がよく、保護司の認知度も実感できた。メールやLINEワークスの体制を構築したところ「実はこう思つていた」という本音がたくさん集まるようになつた。

ネットワーク部では区立小中学校PTA役員を対象に、保護司の活動と社明運動をはじめとした保護司会の活動を説明する『出前講座』を開催している。今年は中学校で保護者250名を対象に行つた。さらに新しい試みとして、区立小学校2校にて児童を対象に更生保護について話を予定。30~40年先を見据えた「種まき」であり、子供たちが大人になつた時、自然に更生保護

シティアップされたことなどにも注目し、「黄色は更生保護のシンボルカラーダヨ」と、身近な方々へ伝える活動も個々で行つてている。

その後、社明運動の周知活動を促進するため「小中学校PTAへの認知度アンケート実施による効果測定」「BBSとの連携強化」などいくつかの提案事項を発表、質疑応答では「運動の意義を伝える自主研修について」「LINEワークスの活用について」などの質問にそれぞれの担当者が回答しました。

協議会後は懇親会が開催され、同じテーブルの第2ブロック(荒川・台東・北・文京区)参加者と意見交換しながらの会食となりました。互いの保護司会の各部の活動や地域のことについてなど会話が弾み、楽しく有意義な時間をお過ごすことができました。令和8年度は北区の開催となりま



懇親会での時田副会長の挨拶

令和7年度 第II期定例研修

日時：令和7年10月14日(火)午後3時～ 場所：文京区民センター2A

講師：荒井智深保護観察官

テーマ：『面接結果の記録化について』

研修部 鈴木 利明

はじめに府中刑務所の西岡慎介所長と作業療法士の林稚憲氏に拘禁刑制度下での刑務所の取組についてお話しを伺いました。



令和7年6月1日から施行された拘禁刑は、従来の懲役刑と禁錮刑を統合した新しい刑罰です。最も大きな変更点は、刑罰の目的であった作業が、改善更生の手段となつたことです。これまで受刑者の状況に関わらず作業を課すことが原則でしたが、拘禁刑では一人ひとりの状況やニーズに応じて、作業をさせない選択も可能になりました。西岡所長は「刑罰として作業をさせるのではなく、社会復帰のために必要だから作業をする。その説明をする責任が職員に生まれました」と制度変更の意義を説明されました。

現在、府中刑務所では受刑者の約18%が65歳以上の高齢者で、約20%が何らかの精神障害を抱えています。高齢で介護が必要な人、学校教育を十分に受けていない若い人、依存症の治療が必要な人など、画一的な作業中心の処遇では社会復帰が困難なケースが増加していることが背景にあります。拘禁刑では受刑者を24の類型に分類し、それぞれに適した処遇を行います。

府中刑務所では5年前から作業療法士が配置され、一般作業ができない受刑者への「機能向上作業」が実施されています。紙折り、紙袋作成、園芸作業、陶芸などを通じて、身体機能や認知機能の回復・向上を図る取組です。林作業療法士は「工場に行けない人は居室で一日中何もせずに過ごすことになり、身体機能が衰えていきます。少しでも機能を回復させて、出所後の生活につなげたい」と活動の意義を語られました。拘禁刑施行後は、教育部門でも「心と体の健康教室」と称したリハビリテーションプログラムを開始し、筋トレ、エアロバイク、脳トレなど、出所を見据えた支援が行われています。

拘禁刑では「対話プログラム」も導入されています。これは職員と受刑者が向き合い、対等な関係でコミュニケーションを図る取組で、一方的な命令・指示ではなく、受刑者の

気持ちを傾聴する時間を設けています。西岡所長は「新たな被害者を生まないため」という言葉でこの取組の意義を説明されました。厳罰化だけでは再犯防止にはつながらず、一人ひとりに向き合った支援が、結果的に地域社会の安全につながるとのことでした。

続いて行われた定例研修

では、荒井智深主任官より保護観察経過報告書の記載について学びました。保護司が毎月作成する保護観察経過報告書は、正式な行政文書となります。保護観察の経過を記録・保存するとともに、良好措置や不良措置などの検討資料、警察・検察からの照会への回答根拠となります。荒井主任官からは「刑が満了して何年も経過した後でも、捜査関係事項照会が来ることがあります。その際、保護司の先生方の報告書が回答の根拠となります」との説明がありました。



面接が終わったら、記憶が薄れる前に重要なところを書き留めることになりますが、その際、対象者が実際に述べたことと保護司が感じたことを明確に分けて記載することが求められます。経過欄では変化をできるだけ詳細に記録し、特に良い変化は良好措置の材料となるため、客観的な根拠のある事実として記録しておくことが推奨されました。報告書は客観的事実を報告する行政文書ですが、主観や憶測であっても、本人が述べたことや客観的に確認できることと分けて書いておけば、書いてはいけないことはないとのことでした。

今回、刑事司法の現場が大きく変化していることを学びました。拘禁刑制度は、受刑者一人ひとりの状況に応じた支援を可能にし、真の社会復帰を目指すものです。刑務所での丁寧な処遇の実態を知り、私たち保護司も襟を正す思いです。また、「面接結果の記録化」の内容を参考に、平素の保護観察活動において、対象者との信頼関係を大切にしながら、より充実した活動が行えるよう努めてまいります。

会務報告

・再犯防止に向けた総合対策

(市川記)

管外研修について

(伊藤記)

■第Ⅱ期定例研修

令和7年10月14日（火）14..30~17..10

於..文京区民センター2A

出席者..36名

面接結果の記録化について

荒井主任管

拘禁刑下における刑務所の取組

府中刑務所長 西岡慎介氏

疾患を抱えた対象者の支援の実際

府中刑務所作業法務技官 林稚憲氏

(市川記)

■第2回自主研修

令和7年9月9日（火）18..00~19..45

於..文京シビックセンター4階シルバーホール

出席者..36名 他1名

「拘禁刑」への改正とその現況について

岸根統括保護観察官

・新たな刑として拘禁刑を創設

・社会復帰支援の充実

・第二次再犯防止推進計画

■ロック別保護司組織運営連絡協議会意見交換会議

令和7年9月17日（水）18..30~20..50

於..礒川地域活動センター2階

出席者..15名

文京区の意見文を出席者が提出し話し合い

それをA.Iでまとめて作成することになった

(伊藤記)

■広報部会議

令和7年9月5日（金）18..30~19..30

於..文京区民センター2B

出席者..10名

情報588号校正作業及び会議
情報589号編集会議

(山田記)

■正副会長会議

令和7年9月1日（月）18..30~19..50

於..文京区民センター4A

出席者..7名

ブロック協議会について

理事役員会日時、場所について

令和7年9月26日（金）13..00~14..45
於..文京シビックセンター5階

出席者..8名 他5名

情報 588号発送作業及び会議

(山田記)

出席者…7名 来場者約90名
中学生ポスター、標語展示と薬物の実物展示

(伊藤記)

出席者…7名 来場者約90名

■ネットワーク部会議

令和7年9月3日（水）18..30~19..30
於..文京シビックセンター3階C会議室
出席者..10名

関連団体交流会について

出席講座は9中、茗台中、汐見小に打診中
三者懇談会は3月上旬ステップ押上を予定

(白石記)

令和7年9月30日（火）10..00~16..00
2日目
於..文京シビックセンター1階アートサロン
出席者..9名 来場者約70名

ポスター、標語展示と薬物の実物展示

(伊藤記)

その他、区立小中学校の行事、学校運営協議会、学校運営連絡協議会等に出席

令和7年9月26日（金）17..30~20..00
於..駒走ダイニング文蔵
出席者..15名

班会として年内の行事を説明他

加藤氏、伊古田氏の送別会

(今井記)



哀悼

桐友会 諏訪あさ様

令和7年10月25日ご逝去

謹んでご冥福をお祈り申し上げます

ブロック別保護司組織運営連絡協議会にて



「地域こどもプラザ」に参加して思う。



本富士地区 佐藤 悅子

日時 令和7年10月26日(日)

会場 湯島小学校

今

回初めて参加させていただきました。雨模様でしたがその盛況ぶりに驚きました。

スタッフは父兄や消防署、消防団の方々、町会の皆や祭連の方、地域のあらゆる団体の方々。その皆さん代々携わって子供達の為にこのイベントは開催され何十年も続けられました。

私は「ビーズ手芸」のコーナーをお手伝いしましたが、スタート時間から家族連れの方達、他の子供たちが沢山来てくれて開催場所になつた湯島小学校の音楽室に入りきれないほどで、教室の外で順番待ちの家族もいて時間を延長して対応しました。

興味深かつたのは向かい側のコスプレ撮影コーナー。お父様方の仮装と用意されたコスプレ用具で参加者を募つて、こちらも中々の盛況ぶりでした。

それぞれの思考を凝らしたコーナーのアイデアを形にする準備や努力は大変だったこと心から感じられました。地域の方々が子供たちの笑顔の為にこのイベントが続けられたのだと実感させられました。

「湯島青少年健全育成会」の素晴らしい趣旨のもと、この1日でも家族が一緒に楽しんでいるこの風景は、スタッフ来場者皆で一緒に校庭で食べたカレーの味と共に子供たちの記憶に残ることと思いました。

第2ブロック合同研修会

文京区更生保護女性会会长 西川 素子

日時 令和7年10月29日(水) 午後2時開会

会場 文京シビックセンター シルバーホール

講演 更生保護施設の現状について

講師 更生保護法人東京実華道場理事長 森山秀実氏

台

東、北、荒川、文京の4区で構成される第2ブロックの合同研修会が担当区である文京区にて開催されました。

成澤文京区長、石川東京保護観察所民間活動支援専門官、山本文京区保護司会会长ご臨席のもと、横山東京更生保護女性連盟会長の挨拶に始まり、更生保護法人東京実華道場理事長森山秀実氏の講演を伺いました。

長年、湯島で運営されていたステップ竜岡を統合し、全面改築されて新たなスタートを迎えたステップ押上（墨田区）の説明をはじめ、被保護者へ心がけていること、入所前から在所中、退所後のかかわり方や、地域とともに歩む工夫についてお話しいただきました。地域の力を生かしともに歩むという、地域との信頼関係を築くという段階を超えた取組に、長年のご尽力が伺え、ともすれば地域に敬遠されがちな施設の、大きな成功例をお示しいただきました。

今回の合同研修会開催にあたり、ご助言いただきました前文女性会長・副会長の皆様、また一緒に走り回つてくださいました役員・理事・福祉政策課の皆様、ご出席いただきました会員の皆様に心よりお礼申し上げます。

台



ホッと一息

Break Time

本富士班 石渡和子

2020年コロナと共に病にかかりました。湿疹に悩まされていましたところ、今度は痛みと呼吸障害5mも歩けず寝返りも出来ない毎日でした。

コロナ時期でしたので、外出も控える事が多く、又会合等も中止になり、私的にはすぐ助かりました。難病申請をしている病気と解つてからは、良いと言われた治療・投薬・手術をして、やつと動けるようになりました。この間、家族・後見人を頼まれた方達・保護司会の皆様には大変迷惑をおかけしました。

今は世話をも務められるようになり、少し安心しております。運動的なものは、もう少し時間がかかる

かりますが、これからが本番と思い頑張って行きたいです。痛みもなく、息も苦しくならず、この当たり前の生活が出来るようになったと思うと、本当に「ホッと一息」です。

大塚班 田和 健太郎

スクールガードを6年間続けて

います。安全な文京区にあって、もっぱら歩道の清掃とあいさつです。小学生約80人と駅に向かう地元の皆さんにも朝の声掛けをして

います。安全な文京区にあって、もっぱら歩道の清掃とあいさつです。小学生約80人と駅に向かう地元の皆さんにも朝の声掛けをして

います。

顔見知りになつたとは言え、多くの通行人の皆さんがあいさつを返して下さいます。ズバリそれは、私が黄色いベストを着ているからでしょう。一日くらいベストを忘れて立つていたらどうなるか、低学年は「いかのおすし」スイッチが入つてしまふかも知れません。



その中で、毎朝立ち話をする小

3男子がいます。新入生の頃は遅刻が多く、2年生では粗暴な言動

が多かつたのですが、3年生になつて穏やかになりポケモン話を

してきます。安心できる環境ができ、先生や友だちとの関係性も良くなつたのでしょうか、参観日に

生き生きとしている姿を見て、親御さんが愛情と肯定的な接し方で彼を変えたと感じました。

少年の保護観察が始まりました。初対面の彼はどこにでもいそ

うな少年でした。厳しい社会ですが、彼が将来に希望を持ち、安心して社会と交わって、成人することを願っています。

あとがき

2025年のノーベル生理学・医学賞が「制御性T細胞」発見者の坂口志文氏に授賞と発表された。実験結果を理解されずに不遇の時代が続いたという氏の会見での言葉が感慨深い。曰く「一つひとつ」。何事にも落ち着いて向き合い、持続してゆく努力こそが目的地に進む確かな道ということであろうか。

今年は、「社会を明るくする運動」も75回。当『情報』もその目的のために、昭和29年に創刊されてより、コロナ禍においても休むことなく発行を続け、すでに70年を超えた。

ひとえにお忙しい中をご寄稿くださった皆様、また、多岐にわたり応援し続けてくださる皆様のお陰と心より感謝申上げます。

堀内 由美子

（広報部）堀内 山田 大橋 米岡 浅川

根尾 岸田 岡崎 西川 山口（青）
塩川 市原 菊川

情報 第五八九号

編集 文京区保護司会 広報部
発行人 文京区保護司会会长 山本諭
事務局 文京区春日一一六一一
文京区役所福祉政策課内
企画・宣伝協同組合
エコフィールド事業本部